

## ナチ時代における田園教育研究の現状と課題

江頭, 智宏

九州大学大学院人間環境学府発達・社会システム専攻(ドイツ現代教育史) : 博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/1904681>

---

出版情報 : 教育基礎学研究. 1, pp.19-31, 2004-03-31. Faculty of Human-Environment Studies,  
Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

## ナチ時代における田園教育研究の現状と課題

江頭 智宏

### 1. はじめに

本稿は、ドイツ新教育の主要な一領域である「田園教育」がナチ時代に辿った過程に関する研究の現状と課題について論じることを目的とする。この場合の「田園教育」とは、ヘルマン・リーツ (Hermann Lietz, 1868-1919) をその創始者とするドイツ田園教育舎 (Deutsches Landerziehungsheim) 系の一連の学校における教育実践がその中心であるが、同時に、ドイツ田園教育舎から多大な影響を受けて公立学校を対象として実施された、学校田園寮 (Schullandheim) における教育実践も念頭に置いている。このような田園教育とは、実生活からかけ離れて文化的にも「墮落」した都市を子どもたちの教育の場所としては否定的にとらえ、それに代わって田園地帯において実施される共同生活の中で行われる教育の中にこそ、子どもたちにとっての理想的な教育を見出すことができるという立場に立つものとしてまとめることができよう。

最初にドイツ田園教育舎の草創期からナチ時代までの史的経緯について概観したい。周知のようにリーツがドイツ田園教育舎を創設する直接の契機となったのは、イギリス人セシル・レディ (Cecil Reddie, 1858-1932) が創設したアボッツホームの学校で教師をしていたことに求められる。イギリスから帰国したリーツは、1898年に初級段階のイルゼンブルク校 (Ilseburg)、1901年に中級段階のハウビンダ校 (Haubinda)、そして1904年に上級段階のビーバーシュタイン校 (Bieberstein) を相次いで設立し、これらの3校はドイツ田園教育舎の起源として位置付けられることになる。その後1906年にリーツとの不和からハウビンダ校を離反したグスタフ・ヴィネケン (Gustav Wyneken, 1875-1964)、パウル・ゲヘーブ (Paul Geheeb, 1870-1961)、マルティン・ルゼルケ (Martin Luserke, 1880-1968) らは、チューリンゲン地方の山間部にヴィッカーズドルフ自由学校共同体 (Freie Schulgemeinde Wickersdorf) を創設することになり、また1910年にゲヘーブは、ヴィネケンとの不和からヴィッカーズドルフ自由学校共同体を辞して新しくオーデンヴァルト校 (Odenwaldschule) を開校する。このような対立関係をもその要因として田園教育舎系の学校が新しく創設されていったのであり、リーツとの直接的な関係をもたないものも含めて、19世紀末からヴァイマル時代にかけて田園教育舎系学校がドイツ全域に拡大されて

いくことになる。

ナチ時代において田園教育舎系学校は多様な経緯を辿ることになり、ファイデル＝メルツはこの時期の状況を、「同調」(Anpassung)と「抵抗」(Widerstand)ととらえている。オーデンヴァルト校と校長ゲヘーブを始めとして、多くの田園教育舎系学校が廃校に追い込まれると共に指導者たちは国外亡命を余儀なくされる一方で、たとえば1933年9月24日に、6校のヘルマン・リーツ学校を中心として、ゾリング田園学寮、南ドイツ田園学寮 ショーンドルフ、ザーレム城校などが連合して、「ドイツ田園教育舎ライヒ組合」(Reichsfachschaft Deutsche Landerziehungsheime)が創設されたことに見られるように、一部ではナチスに対する協力も表明されることになる<sup>(1)</sup>。ただしナチ時代にドイツ国内で存続した田園教育舎系学校も、第二次世界大戦の時期になると、「ナポラ」(Nationalpolitische Erziehungsanstalt)へと転換されたり、強制的に公立学校化されたり、あるいは「ドイツ私立学校ライヒ組合」に組み込まれたりといった過程を辿ることになる。ナチ時代にドイツ国内で存続した田園教育舎系学校を如何にとらえるかということは、研究史上において重要な課題として残っている。

ナチ時代における田園教育に関する研究史の整理において、ともに草創期から現代までの田園教育舎系学校についての研究史を整理したハンゼン＝シャベルクの論稿<sup>(2)</sup>と、山名氏の著書『ドイツ田園教育舎研究－「田園」型寄宿制学校の秩序形成－』における研究史の整理<sup>(3)</sup>が大いに参考になるものである。ドイツ田園教育舎の現代的意義を探るための手段としてその歴史的経緯について回顧したハンゼン＝シャベルクは、ドイツ田園教育舎の発展段階を4段階に分けている。それによると、第1期が最初のドイツ田園教育舎イルゼンブルク校の設立(1898年)からリーツの没年(1919年)までの時代、第2期がヴァイマル時代、第3期がナチ時代、そして第4期が第二次世界大戦後から現代、と区分される。その中でも本稿が対象とする第3期については、ナチ時代において継続して存続した側面とドイツでの教育活動を中止して亡命した側面とを合わせもつ田園教育舎と、公職を追放されたユダヤ人らがユダヤ人子弟のために新設した田園学寮の2つに研究領域を分けている。彼女の論稿が書かれたのは1994年であるが、ドイツ田園教育舎の研究は多くが第1期に集中している一方で、第3期の研究は僅少であるとしている。その中において、田園教育舎に関する研究として後述するシャーレイの研究<sup>(4)</sup>を、また田園教育舎と田園学寮の双方にまたがる「亡命教育」の研究としてファイデル＝メルツ<sup>(5)</sup>を挙げている。

ファイデル＝メルツの研究は、ヒトラー内閣の成立をもってドイツ新教育が終焉したととらえてきたシャイペヤレールスらによる諸先行研究に対する批判の上に立って、ナチ時

代に国外亡命に踏み切った新教育の実践者たちの「亡命教育」について明らかにした先駆的業績である<sup>(6)</sup>。ナチ時代に焦点を当てたことが彼女の研究における画期的な点であったと言え、従来の研究において光が当てられてこなかったナチ時代にあっても継承されたドイツ新教育の遺産について多大な価値を見出していることが窺える。

本稿は、田園教育舎運動の伝統を受け継いだ、そのようなナチ時代の「亡命教育」の存在を踏まえたうえで、近年その研究蓄積が著しいといえる、ナチ時代にドイツ国内で存続した田園教育舎系学校と学校田園寮の研究史について論じるものとする。

## 2. ドイツ国内で存続した田園教育の研究史

以下、ナチ時代においても継続してドイツ国内で存続した田園教育の研究史を取り上げる。その中でも、ナチスに対して最も積極的に協調の姿勢を示したヘルマン・リーツ学校を中心としながら、一旦は廃校となるもののかつての田園教育舎系学校を「継承」してヒトラー政権下で新しく開校されたオーデンヴァルト共同体 (Gemeinschaft der Odenwald) とヴィッカーズドルフ学校共同体 (Schulgemeinde Wickersdorf)、およびナチ時代にその「重要性」が強調された学校田園寮の研究史を取り上げる。

### (1) ヘルマン・リーツ学校

1933年9月24日にドイツ田園教育舎ライヒ組合が結成された際、リーツの直系の学校群であるヘルマン・リーツ学校は、ハウビンダ校、ビーバーシュタイン校、ゲベゼー校、エッタースブルク校、ブヘナウ校、シュピーカーオーク校の6校が、ドイツ田園教育舎ライヒ組合に名を連ねた。その創設以来田園教育舎系学校の中心にあったヘルマン・リーツ学校は、ナチ時代においても存続した田園教育舎系学校の中核にあったと言える。以下、研究史におけるナチ時代のヘルマン・リーツ学校の位置付けについて、とりわけ総指揮官アルフレッド・アンドレーゼン (Alfred Andreesen, 1886-1944) を中心として論じるものとする。アンドレーゼンは、『教育』や『生活と労働』、ならびに1935年の論文集『ヘルマン・リーツ—田園教育舎の創始者—』を始めとする各論稿の中でヒトラーとリーツとの間の精神的親縁性を繰り返し展開させており<sup>(7)</sup>、極めて「論争的」な人物であると言える。1934年の『教育』第9号にも採録された、「リーツが教育的に追求したものを、ヒトラーが政治的に貫徹させた」という、講演での発言は、その最も象徴的なものである。

ハンゼン＝シャベルクは前掲の書の中で、先述したように、ナチ時代の田園教育舎系学校を、「同調」と「抵抗」という構図においてとらえている。抵抗した一連の「亡命教育」

に対して、ナチスに同調した田園教育舎系学校としてヘルマン・リーツ学校を指摘している。ただ彼女の場合は、同調した田園教育舎系学校とは、「亡命教育」に対しての飽くまでも補足的な位置付けである。ハンゼン＝シャベルクは、『教育』や『生活と労働』に掲載されたアンドレーゼンの主張を根拠として、アンドレーゼンとヘルマン・リーツ学校が、ナチスを主体的に支持していたことを確認しているが、そもそもリーツの時代からヘルマン・リーツ学校は、伝統的に民族主義を主張し、非ドイツのものを排斥していたことから、アンドレーゼンがリーツの教育思想・教育実践を単純に改悪したとは言い難いと述べている。また、すでにヒトラー内閣の成立以前から生徒集会の権威的再編制やヒトラー・ユーゲントの導入がヘルマン・リーツ学校において実施されていたことに見られるような、ナチスに対するアンドレーゼンの協力の理由については、ヘルマン・リーツ学校が独立性を保持し、「ナポラ」への転換を防止するためであったとしている<sup>(8)</sup>。

ヘルマン・リーツ学校の保身のためにナチスに同調したという見解は、ケレンツがとりわけ強調しているものである。ケレンツは、ヴァイマル体制の批判者であったアンドレーゼンはナチスに抵抗する精神的素地が脆弱であったとしつつも、ナチスへの同調は、ヒトラー内閣の成立直後から新教育に根差した諸学校が徹底した弾圧の対象とされたことを背景とした、政治的な対抗処置がその主要理由であったと述べている。アンドレーゼンが『生活と労働』や『教育』の誌上で再三にわたってナチスを支持ないし賞賛していた理由は、アンドレーゼンにとって、ヒトラー政権下において田園教育舎系学校の「存在の正当性」(Existenzberechtigung)を獲得することが最重要課題であったからであるとされる。またヘルマン・リーツ学校の存続は、リーツやドイツ全土の田園教育舎系学校、ならびに学内の生徒や教師らに対する、総指揮官自身の「責任」(Verantwortung)の意識に拠るところも大きかったと考えられている<sup>(9)</sup>。こうしたハンゼン＝シャベルクとケレンツの見解に共通するのは、公刊された雑誌を出典としてヘルマン・リーツ学校とアンドレーゼンによるナチスの支持を取り上げたうえで、その主要理由を、ドイツ田園教育舎を存続させるための手段に求めている点である。

チューリンゲンの地方教育史の観点から、ドイツ新教育の伝統とナチスの教育政策の関係を考察することを目的としたレザノフスキーも、ヘルマン・リーツ学校とアンドレーゼンを取り上げた。周知のようにチューリンゲン州は、ドイツ田園教育舎やペーター・ペーターゼン (Peter Petersen, 1884-1952) のイエナ・プランの発祥地といったドイツ新教育運動の中心地であったとともに、ヒトラー内閣の成立以前に内務省と国民教育省にすでにナチスが入閣していた州であったこともあり、ドイツ新教育の伝統とナチスの教育政策との

関係を検証するうえで格好の地域であったと言えよう。当論文では、ナチスへの協力関係を示した「ドイツ田園教育舎ライヒ組合」におけるアンドレーゼンの演説が主たる分析対象となっており、ヒトラー内閣の成立をもってリーツの教育思想が実現されたと考えたアンドレーゼンにとって、強制的同質化と「主体的な強制的同質化」(Selbstgleichschaltung)とが同時並行的に進行したとしている。そしてそのことがヘルマン・リーツ学校のナチスへの同調を容易にもたらしたと指摘しているが、確信的にアンドレーゼンがナチスを支持していたのかという点については留保している。ただいずれにせよ、チューリンゲン州の伝統的な新教育運動がナチスの教育政策と密接に関連したことは、チューリンゲン州のよき伝統の喪失につながったと結論付けている。また、レザノフスキーの研究において注目すべき点は、ドイツ新教育とナチズムとのイデオロギー的親近性を踏まえたうえで、ナチ時代に存続した田園教育舎系学校がその内容や目標において果たしてナチズムと一致していたのか、あるいは学校の日常生活のレベルではどうであったのかというミクロなレベルでの問いの重要性を提起していることである<sup>(10)</sup>。ただし彼の論文の中では、この点にまで考察が進められているとは言えず、チューリンゲン州の学校において、「人種学」などの比重が重くなったという指摘にとどまっていると言える。

最初のドイツ田園教育舎イルゼンブルク校の設立から100周年を記念して1998年6月23日にリューネブルク大学で行われた、ナチ時代の田園教育舎系学校に関する講演が基になっているアルファイの論稿も、アンドレーゼンとヘルマン・リーツ学校に中心的な焦点が当てられている。アルファイは、ヴァイマル時代末期からナチ時代という過渡期の田園教育舎系学校におけるキーパーソンとしてアンドレーゼンをとらえており、公刊された雑誌出版物の記述内容にのみ拘泥するのではなくアンドレーゼンの動向全体に目を向けて分析すべきことを主張している。ただアンドレーゼンに対する評価からは距離を置いており、ナチスへの同調の背景として、密告者の存在なども押さえないといけないといった点を強調している。アルファイの論稿はナチ時代の田園教育舎系学校の全体像を対象とした論稿でもあり、各田園教育舎系学校は共通の基盤をもちながらも、ヘルマン・リーツ学校に代表される右派的田園教育舎と、オーデンヴァルト校などの左派的田園教育舎とは異なった経緯を辿った点について言及している<sup>(11)</sup>。

政治的背景やナチスによる圧力からやむを得ず同調したというアンドレーゼン像の書き換えを目的とした研究としてケーニツヒが挙げられ、彼はアンドレーゼン自身が確信的なナチスの支持者であったというテーゼを打ち出した。ケーニツヒはアルファイと同じく、ナチ時代初期における公刊された雑誌に掲載されたアンドレーゼンの論稿に史料が限

定されていることに先行研究の不備を求めており、そのうえで彼はベルリン連邦文書館の未公開史料等をも駆使している。その中で最も視覚的に訴えている史料は 1937 年にアンドレーゼンがナチスに入党した際の黨員書であり、他にもナチス教員同盟への加盟や突撃隊への加盟を諸資料から明らかにしている。またナチ時代のアンドレーゼンの活動自体にも目が向けられ、プヘナウ、シュピーカーオーク、ピーバーシュタイン、ハウビンダの各校を事例として、ヘルマン・リーツ学校をヒトラー・ユージェントの活動場所として主体的に活用していた点を明らかにすることを通じて、アンドレーゼンに確信的なナチズム信奉者としての根拠を見出している<sup>(12)</sup>。極めて明快な論調であるが、「確信犯」としてのアンドレーゼン像を描き出すことに傾斜しすぎており、さらに「確信犯」としてのアンドレーゼンを描くに当たっては入党証などの史料では十分ではないと言える。

## (2) オーデンヴァルト共同体

オーデンヴァルト共同体は、1934 年のオーデンヴァルト校の閉鎖を受けて、オーデンヴァルト校の教師であったハインリヒ・ザックス (Heinrich Sax) やヴェルナー・マイヤー (Werner Meyer) らを指導者として新たに開校された学校である。田園教育舎系学校とその指導者に関する文献を整理した『ドイツ田園教育舎文献目録』の中で、オーデンヴァルト共同体は次のように述べられている。「(オーデンヴァルト校の存続を求める一引用者) 両親たちの要望に応じて、極めて縮小された規模ではあるが、ハインリヒ・ザックスの指導のもとオーデンヴァルト共同体という名前で、ナチスとの絶え間ない衝突の中で存続した。1939 年 3 月まではかつての方法に従って、オーデンヴァルト校のカリキュラムが存続した」<sup>(13)</sup>。規模は縮小されたものの、オーデンヴァルト共同体が、オーデンヴァルト校の特徴を多く受け継いでいたことが窺える。

オーデンヴァルト共同体に関する研究として、管見の限りシャーレイが挙げられる。彼の研究は、ヒトラー内閣の成立からオーデンヴァルト校の閉鎖までの間に、オーデンヴァルト校が強制的に「転換」(Transformation) されていく過程(具体的にはオーデンヴァルト校がその特徴とした男女共学や生徒集会などの喪失)に主たる焦点を当てたものであるが、その後の経緯として、スイスに亡命したゲヘーブが開校した人間性の学校とともに、オーデンヴァルト共同体についても言及されている。シャーレイは当著を著した理由のひとつに、ヒトラー政権下における新教育に根ざした学校に向けられた人間の本性的な興味を挙げている<sup>(14)</sup>。

シャーレイによれば、人間性の学校とオーデンヴァルト共同体は、その指導者の間で協

調関係が保たれており、決して単に対立するものとしてのみとらえられるものではなかった。むしろザックスやマイヤーらは、オーデンヴァルト共同体において、かつてのオーデンヴァルト校における教育的遺産やゲヘーブの精神を守ることを積極的に試みていたことが述べられている。その一例として柔軟なコース・システムの採用や、ヒトラー式挨拶の拒絶などが挙げられる。ナチ時代にあっても一定程度の自治をヘッセン州当局に要求しており、そのためオーデンヴァルト共同体は「美しく、隠遁した島」であったとある教師は述べている。その一方でオーデンヴァルト校からの改変も確実に見られた。渡邊氏によっても指摘されているところであるが<sup>(15)</sup>、オーデンヴァルト校の最大の特徴であり、オーデンヴァルト共同体も若干は受け継いでいた男女共学は漸次的に廃止され、またユダヤ人生徒の数も急激に減少した。ゲヘーブの精神を生かしつつもナチスの教育政策を遵守しなければならない状況を象徴するものとして、シャーレイはオーデンヴァルト共同体が作成したパンフレットの中に諸矛盾が現れてきたことを挙げている<sup>(16)</sup>。このようなシャーレイの研究からは、オーデンヴァルト校の遺産を維持することを目的としながらもヒトラー政権下での存続が至上命題とされた、矛盾を抱えた学校であったというオーデンヴァルト共同体の像が窺える。

### (3) ヴィッカーズドルフ学校共同体

ヴィッカーズドルフ学校共同体とは、ヒトラー内閣成立の1ヶ月前の1932年12月に早くも閉鎖された自由学校共同体ヴィッカーズドルフの後を受けて、校長パウル・デーリング (Paul Döring) の下で1933年4月に開校した学校である。前掲した『ドイツ田園教育舎文献目録』において、ヴィッカーズドルフ学校共同体は以下のように記されている。「1933年からは(自由学校共同体ヴィッカーズドルフとは一引用者)全く違う形態で、パウル・デーリングの指導のもと学校共同体ヴィッカーズドルフとして、ナチスの教育要求に依拠しながら存続した」<sup>(17)</sup>。この記述から、オーデンヴァルト共同体と比較して、ヴィッカーズドルフ学校共同体ではナチスとの協調関係がより成立していたことが窺える。

ヴィッカーズドルフ学校共同体は、チューリンゲン州の地域教育史を対象としたレザノフスキーが前掲論文の中で、その全体的特徴について取り上げている。彼の記述は1938年に出版された『ヴィッカーズドルフの過去と現在』に依拠したものであり、ヴィッカーズドルフ学校共同体では全体を通じてナチズム的世界観に基づいた教育がなされるようになり、具体的には性格教育や自己規律が重んじられ、かつ人種主義的が浸透していたことなどが述べられている<sup>(18)</sup>。このように、ナチスの教育政策に適合した学校として、レザ



ノフスキーはヴィッカーズドルフ学校共同体を位置付けている。

また筆者は別のところで、ドイツ青年運動文書館所蔵の史料によりながら、学校共同体ヴィッカーズドルフの開校から 1938 年までの経緯を取り上げた。その中では、学校共同体ヴィッカーズドルフは自由学校共同体ヴィッカーズドルフの否定の上にあったとしつつも、自由学校共同体ヴィッカーズドルフから受け継がれた教育理念とヒトラー政権下で提唱された教育上のイデオロギーとが渾然一体としていた学校であったことを明らかにした。そして、単純にナチズム的世界観に基づいた教育が実施されていた学校であるというよりも、自由学校共同体ヴィッカーズドルフの理想をヒトラー政権下で提唱された教育イデオロギーに結び付けようとした学校であったと結論づけた<sup>(19)</sup>。

#### (4) 学校田園寮

学校田園寮とは、とりわけ大都市にある学校が、学級単位や学年単位で一定期間田園地域へと赴き、田園地域のもつ豊かな教育環境を利用することによって教育の深化を図ることを目的とするために田園地域に設けられた教育施設のことである。具体的な教育活動の内容としては、狭義の授業を始めとして、体操、スポーツ、水浴、散策、遠足、音楽、演劇、読書、菜園活動、集団での話し合い、といったものを挙げることができ、こうした時間割に従いながら、児童や生徒は数日間ないし数週間、教師とともに自然の中で共同生活を体験するのである<sup>(20)</sup>。

現代の学校教育に対するオルタナティブな教育実践としての学校田園寮に関する研究は数多く見られるものの、学校田園寮の歴史に対象を当てた研究は管見の限りそれほど多く見られるものではない。以下、いずれも通史の一部ではあるが、ドイツにおける先行研究として3点挙げる。第1に、ドイツ学校田園寮全国連盟が出版したハンドブックである『学校田園寮における教育』の中で、学校田園寮の通史を描いたクルーゼの論稿が挙げられる。その中でクルーゼは、ナチ時代の学校田園寮の特徴として、制度的に曖昧であったヴァイマル時代と比べて、より明確に制度化されていくという点を指摘している<sup>(21)</sup>。第2に、リトケの編集になる『バイエルン教育制度史ハンドブック』の第4巻は、年代ごとに編纂された第1～3巻とは異なり各項目別にバイエルンの教育制度史を対象としたものであるが、その中でペーテックが学校田園寮の通史を担当している。とくにナチ時代におけるバイエルンの学校田園寮の特徴として児童生徒に民族意識を強く涵養させることが課題とされた点を明らかにしている<sup>(22)</sup>。第3に、ドイツ学校田園寮全国連盟は創立75周年を記念して、機関誌『学校田園寮』に4回にわたって通史を掲載し、その第2回目に

## ナチ時代における田園教育研究の現状と課題

においてケーニツヒが、ヴァイマル時代末期からナチ時代の学校田園寮を取り上げている<sup>(23)</sup>。連邦文書館等の未公刊史料によりながら、学校田園寮がナチズム体制の内部へと取り込まれていく過程について詳細に書かれているが、クロジカルな史実の列記といった側面が強く論文の形式をとったものではない。また以上のようにナチ時代を対象とした学校田園寮は、実施主体であるドイツ学校田園寮全国連盟の側から主に書かれていることが窺える。

また筆者も別のところで、ベルリン連邦文書館とバイエルン中央州立文書館の史料に依拠しながら、ヴァイマル時代からナチ時代にかけての学校田園寮について取り上げた。その中でナチ時代については、第5回のドイツ学校田園寮全国連盟の会議を通じて学校田園寮の「重要性」が認識され、その後学校田園寮が、ナチス教員同盟とライヒ青少年指導部の内部へと統合されていく過程について明らかにした<sup>(24)</sup>。

以上のように、ナチ時代にドイツ国内で存続した田園教育舎系学校および学校田園寮の研究は、管見の限りではあるが、1990年代になってからヘルマン・リーツ学校を中心として研究が進められたと言える。一方でその他の学校については、まだ依然として研究が始まったばかりであると言える。

### 3. 今後の課題

ヒトラー内閣の成立後、ドイツ新教育に根差した多くの教育機関が弾圧の対象となり閉鎖された一方で、ドイツ国内において存続した一部の田園教育舎系学校や学校田園寮に関する研究は、重要な課題として残されていると考えられる。その理由は、田園教育舎系学校や学校田園寮がナチスに単に「同調」したという次元にとどまるどころにあるのではなく、厳格な視学官制度を敷いたヒトラー政権下にあつて、それらがナチ体制にまさしく適合させる形で改変された上で存続したという点にある。すなわちナチ時代においても継続して存在したと言っても、田園教育舎系学校や学校田園寮は、以前の教育目標・教育方法をそのまま保っていたのではなく、そのことから、言うまでもなくナチスはドイツ新教育に根差した教育機関を閉鎖へと追い込むことによってドイツ新教育を廃止した一方で、ドイツ新教育を都合よく利用していくことによってドイツ新教育を廃止していったのではないかという観点を筆者はもつものである。こうした観点は、ヒトラー内閣の成立をもってドイツ新教育が終焉したとする視角<sup>(25)</sup>や、ドイツ新教育とナチズムとの親縁性を強調する視角<sup>(26)</sup>からは導き出されるものではない。また比較の上でも、ナチ時代における一連の

「抵抗教育」の研究は極めて重要であるが、ハンゼン＝シャベルクやアルファイのように「抵抗」した左派的田園教育舎と「同調」した右派的田園教育舎という枠組みでとらえたのでは、問題の単純化につながりかねないと考えられる。さらにオーデンヴァルト校を研究したシャーレイは研究の理由を人間の自然な興味に求め、ケーニツヒもアンドレーゼンの過去を暴くといった傾向に傾斜しており、また学校田園寮に関する研究も自らの通史を描くということに重きが置かれてきたなど、ナチ時代の田園教育舎系学校や学校田園寮を対象とした研究においても、ナチスに利用されることによって廃止されていったという新教育の問題は十分に意識されてきたとはいいがたい。さらにこの問題は、ナチスは実際に自らの教育理念が極めて空虚であったという側面や、エルカースらによって指摘されているドイツ新教育のアンビヴァレントな側面<sup>(27)</sup>によって補強されるものであると言える。

またヘルマン・リーツ学校の研究史の中で示したことであるが、先行研究においては、指導者アンドレーゼンが主体的にナチスに協力関係を示したのか、あるいはドイツ田園教育舎の保身のために協力関係を余儀なくされたのかという点が重要な課題として位置付けられている。もちろん筆者もこうしたアンドレーゼン自身の行動に関する問題は重要な課題として認めるものであるが、アンドレーゼンの「同調」を問題とするあまり、ヒトラー政権という権力の発動者に関する視点が抜け落ちてしまっているのではないかと考えられる。ナチ時代にドイツ国内で存続した田園教育舎系学校や学校田園寮に関して、マクロなレベルでのヒトラー政権側からの意図を明確にしながら、ヘルマン・リーツ学校だけに偏ることなく、ミクロなレベルでの個別の教育機関の具体的な教育内容や日常生活にまで立ち入った研究が今後の課題として残されていると言えよう。

## 【注】

- (1) Feidel-Mertz, Hildegard: *Schulen im Exil. Die verdrängte Pädagogik nach 1933*(künftig: *Schulen im Exil*), Reinbeck 1983, S.25-33.
- (2) Hansen-Schaberg, Inge: Haubinda. Die Keimzelle der Landerziehungsheimbewegung, in: Röhrs, Hermann/Pehnke, Andreas(Hg.): *Die Reform des Bildungswesens im Ost-West Dialog. Geschichte, Aufgaben, Probleme*, Frankfurt am Main 1994, S.103-115.
- (3) 山名淳『ドイツ田園教育舎研究－「田園」型寄宿制学校の秩序形成－』風間書房、2000年、12-18頁。
- (4) Shirley, Dennis: *The Politics of Progressive Education. The Odenwaldschule in Nazi Germany*, Cambridge/Massachusetts/London, Harvard University Press, 1992.

- (5) Feidel-Mertz, Hildegard: *Schulen im Exil*; Ders.: *Pädagogik im Exil nach 1933. Erziehung zum Überleben*, Frankfurt am Main 1990. なお、ハンゼン＝シャベルクは、第3期の研究として、ヘアリンゲン田園学寮に関するシャハネの研究 (Schachne, Lucie: *Erziehung zum geistigen Widerstand. Das jüdische Landschulheim Herrlingen 1933 bis 1939*, Frankfurt am Main 1986.) にも触れている。
- (6) 上記以外のファイデル＝メルツの研究として、Feidel-Mertz, Hildegard: *Sisyphos im Exil. Die verdrängte Pädagogik 1933-1945*, in: Keim, Wolfgang (Hg.): *Pädagogen und Pädagogik im Nationalsozialismus. Ein unerledigtes Problem der Erziehungswissenschaft*, Frankfurt am Main/Bern/New York/Paris 1988, S.161-178. が挙げられる。また「亡命教育」研究の動向紹介として、Keim, Wolfgang: *Verfolgte Pädagogen und verdrängte Reformpädagogik*, in: *Zeitschrift für Pädagogik*, Jg.32(1986), S.345-360. ファイデル＝メルツの研究を参照して小峰氏も「亡命教育」の遺産の重要性を主張している (小峰総一郎『ベルリン新教育の研究』風間書房、2002年、516-527頁)。
- (7) Koerrenz, Ralf: *Hermann Lietz. Grenzgänger zwischen Theologie und Pädagogik. Eine Biographie*, Frankfurt am Main 1989, S.12.
- (8) Feidel-Mertz, Hildegard: *Schulen im Exil*, S.25f.
- (9) Koerrenz, Ralf: *Landerziehungsheime in der Weimarer Republik. Alfred Andreesens Funktionsbestimmung der Hermann Lietz-Schulen im Kontext der Jahre 1919 bis 1933*, Frankfurt am Main 1992, S.226-240.
- (10) Lesanovsky, Werner: *Schulreformerische Traditionen und nationalsozialistische Schulpolitik*, in: Heiden, Detlev/Mai, Gunther(Hg.): *Nationalsozialismus in Thüringen*, Weimar/ Köln/ Wien 1995, S.399-420; Ders.: *Was Lietz pädagogisch erstrebte, hat Hitler politisch durchgesetzt. Schulreformerische Traditionen und nationalsozialistische Schulpolitik in Thüringen*, in: *Zeitschrift für Pädagogik*, Jg.44(1998), S.523-542.
- (11) Alpei, Hartmut: *Idylle zwischen Verweigerung und Verstrickung. Die Landerziehungsheime in der Zeit des Nationalsozialismus*, in: Ziegenspeck, Jörg W.(Hg.): *Eine Idee wird Hundert. 100 Jahre Landerziehungsheime in Deutschland*, Lüneburg 1998, S.27-40.
- (12) König, Karlheinz: *Nur angepasst oder überzeugter Nationalsozialist? Alfred Andreesen und die Landerziehungsheime im Nationalsozialismus. Zur Revision eines pädagogischen Mythos*, in: *Jahrbuch für Historische Bildungsforschung*, Jg.7(2001), S.61-88.
- (13) Schwarz, Karl(Hg.): *Bibliographie der deutschen Landerziehungsheime*, Stuttgart 1970,

S.207.

- (14) Shirley, Dennis: *The Politics of Progressive Education*, p.4.
- (15) 渡邊隆信「20世紀初頭ドイツにおける男女共学の実験－オーデンヴァルト校生徒の日常生活－」『兵庫教育大学研究紀要第1分冊』第18巻（1998年）、54頁。
- (16) Shirley, Dennis: *The Politics of Progressive Education*, pp.186-196.
- (17) Schwarz, Karl (Hg.): *Bibliographie der deutschen Landerziehungsheime*, S.250.
- (18) 注(10)の文献参照。
- (19) 拙稿「1930年代における学校共同体ヴィッカーズドルフ」『飛梅論集』（九州大学大学院人間環境学府教育学コース）第3号（2003年）、129-143頁。
- (20) 拙稿「ヴァイマル時代におけるシュールラントハイムの活動状況について－その多義性・多様性を中心として－」『国際教育文化研究』（九州大学大学院人間環境学研究院国際教育文化研究会）第3号（2003年）、15頁。
- (21) Kruse, Klaus: Zur Geschichte der Schullandheimbewegung und Schullandheimpädagogik, in: Verband Deutscher Schullandheim e. V. (Hg.): *Pädagogik im Schullandheim. Handbuch*, Regensburg 1975, S.11-108.
- (22) Petek, Edwin: Schullandheimbewegung, in: Liedke, Max (Hg.): *Handbuch der Geschichte des Bayerischen Bildungswesens*, 4. Bd., Bad Heilbrunn/OBB 1997, S.109-124.
- (23) König, Karlheinz: 75 Jahre Schullandheimbewegung. Zur Geschichte der Schullandheimbewegung und Schullandheimpädagogik. Teil 2: Vom Vorabend der Machtergreifung bis zur Stilllegung des NSLB(1933-1943/45), in: *Das Schullandheim*(2000), S.4-75.
- (24) 拙稿「1930年代ドイツにおけるシュールラントハイム」『日本の教育史学』第46集（2003年）、241-259頁。
- (25) Vgl. Wolfgang, Scheibe: *Die reformpädagogische Bewegung 1900-1932*, Weinheim/ Berlin/ Basel, 1969; Röhrs, Hermann: *Die Reformpädagogik. Uesprung und Verlauf in Europa*, Hannover/Berlin/Darmstadt/Dortmund 1980.
- (26) Vgl. Kunert, Hubertus: *Deutsche Reformpädagogik und Faschismus*, Hannover/Darmstadt/ Dortmund/Berlin 1973.
- (27) ドイツ新教育のアンビヴァレントな性格を指摘したエルカースは、「子どもからの教育」を標榜するドイツ新教育とは、本来的にはナチズムと因果的に結び付くものではないとしつつも、都市の自由主義に対するルサンチマン感情から生み出された「民族共同体」思想が新教育と結び付くことによって、「民族のため教育」という考え方

がドイツ新教育の中に生じてくるとしている (Oelkers, Jürgen: *Pädagogischer Liberalismus und nationale Gemeinschaft. Zur politischen Ambivalenz der Reformpädagogik in Deutschland vor 1914*, in: Hermann, Ulrich/Oelkers, Jürgen(Hg.): *Pädagogik und Nationalsozialismus*, Weinheim/Basel 1989, S.195-219; Oelkers, Jürgen: *Erziehung und Gemeinschaft. Eine historische Analyse reformpädagogischer Optionen*, in: Berg, Christa/Ellger-Ruttgardt, Sieglind(Hg.): *Du bist nichts, Dein Volk ist alles. Forschungen zum Verhältnis von Pädagogik und Nationalsozialismus*, Weinheim 1991, S.22-45.)。例えば、本稿との関連において、ヴィッカーズドルフ自由学校共同体の指導者であったグスタフ・ヴィネケンは、戦争を、「民族的生活に至るもの」や「新たな民族的自己意識」であるととらえており、彼の中では子どもにとっての倫理的経験として第一次世界大戦が称揚された。この点は、ドイツ新教育の中で「子どもからの教育」と「民族のための教育」とがアンビヴァレントに結び付けられたことのひとつの証左であるとしている。こうしたエルカースによるドイツ新教育把握の重要性は、国内においては管見の限り、川瀬氏と田村氏によって指摘されている (川瀬邦臣「ドイツ新教育とナチスの教育—その連続性をめぐって—」『東京学芸大学紀要第1部門(教育科学)』第45集(1994年)、79-88頁、田村栄子「改革教育学運動とナチズム—パウル・エストライヒの思想についての—考察—」『静岡英和女学院短期大学紀要』第29集(1997年)、281-295頁)。川瀬氏はエルカースの論に着目しながら、ナチスによって積極的に取り上げられた側面をももった歴史的な性格を有するものとしてドイツ新教育を理解することの必要性を述べており、その事例研究としてリーツを取り上げた (川瀬邦臣「H. リーツの共同体教育論」『東京学芸大学紀要第1部門(教育科学)』第47集(1996年)、229-238頁。川瀬邦臣「H. リーツの教育者論」『東京学芸大学紀要第1部門(教育科学)』第48集(1997年)、31-42頁)。また田村氏も上記の論文において、「フォルク」概念を軸としてエストライヒの思想のアンビヴァレントな側面を指摘している。